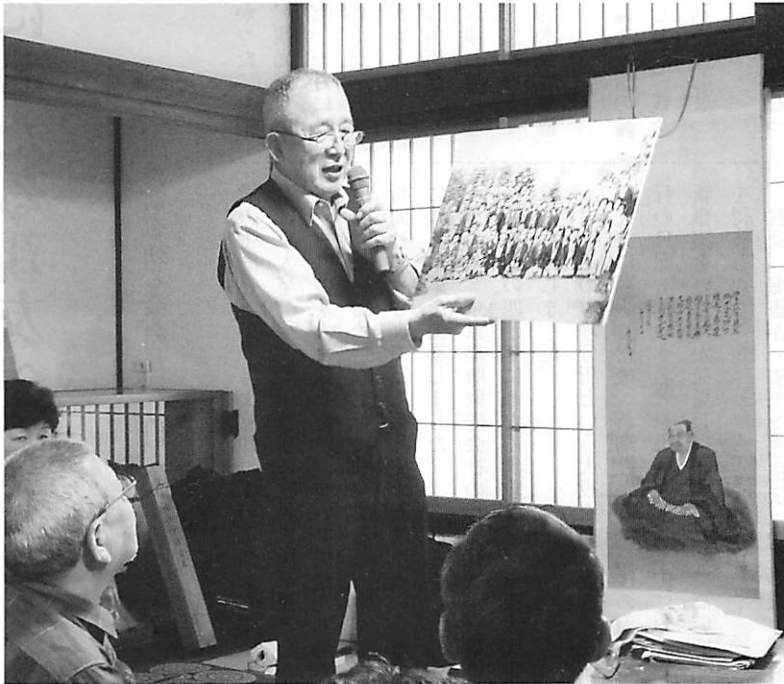


# 清水の近代化に貢献した 次郎長の足跡を明らかに

次郎長翁を知る会・会長補佐兼事務局長代行

## 田口英爾さんを悼む

平成二十二年四月十八日、末廣で開かれた「次郎長巷談」で次郎長十七回忌の写真を説明する田口英爾氏



# 次郎長

次郎長翁を知る会  
会報 第31号  
平成25年6月4日発行

発行所 〒424-0806  
静岡市清水区辻1-1-3-103  
(公財)静岡観光コンベンション協会  
清水事務所内  
TEL (054) 388-9181  
発行人 竹内 宏  
題字

印刷所 株ニシガイ  
TEL (054) 352-2188

本会の産みの親であり、創立から二十年に渡り大黒柱として活躍された田口英爾氏が、平成二十五年三月二十二日逝去されました。享年八十二歳、戒名は英嶽耕文居士。三月二十六日、生家である梅蔭寺にて多数の参列者により葬儀がしめやかに執り行われました。今号は田口氏追悼特集として、竹内宏会長、山田健司副会長、作家の諸田玲子氏がご尊前に捧げた弔辞の全文を、ご遺族の了解を得て掲載しました。

田口氏が立案し実現に奔走した昨年六月六日の当会創立二十周年記念「加藤剛さん清水を語る」と、本年三月六日山梨県立博物館「黒駒勝蔵対清水次郎長特別展」への日帰りバスツアーは次号で報告させていただきます。

また、田口氏が講師を担当した末廣での「次郎長巷談」の今年度一回目は当会が企画したガイドウォークを行ないます。次郎長没後百二十年となる命日の六月十二日に明治二十六年の葬列と同じ道を歩き次郎長墓前行なわれる供養祭へ参加します。

六月十二日九時三十分清水区港橋バス停すぐの「末廣」に集合。小雨でも開催します。六月五日までに事前申込みを「末廣」(054・351・6070)にお願いします。

次郎長命日の六月十二日に百二十年前と同じ道を末廣から梅蔭寺へ向かう「次郎長巷談ガイドウォーク」にご参加下さい。

# 七十三年間にわたる親友へ

次郎長翁を知る会長 竹内 宏

田口君、君は昨年末から調子が悪かったにも拘わらず最後まで文化活動、歴史研究、觀光振興に對する熱意を絶やさず、感動しました。一月には無理を押し、私と一緒に興津の觀光ボランティア会議にでかけ、東高の同窓会にも出席しました。

君は、二月には伊藤静大学長、芳賀美術館長、歴史家の小和田先生、花森英和学園理事長等が参加される静岡文化會議に、幹事役として出席するつもりでした。また、四月の東京・清水会の準備もしていました。

痛の苦しみに耐えつつ、新しい知識と友情の輪を求めて、渾身の力を絞ろうとしましたが、残念ながら二月にはエネルギーが一挙に消えてしまったようです。

私は、君とは岡小学校四年生の時、同級になって以来、旧制清水中学、旧制静岡高校、東京大学経済学部と同じコースを進み、小学校と中学校では何回も組替えがありました。不思議なことにはずっと同じクラスでした。私は、絶えず君から文学と歴史を学び、最近では永井荷風を教えてもらっていました。

実に、七十三年間にわたる親友ですから、私は

君の生涯を誰よりもよく知っているつもりです。君は東大卒業後、柴田書店の役員出版部長となつて、一流の茶人と知り合い、ついで生産性本部の出版部長を勤め、八七年に独立すると、すぐ毎日新聞社の「写真で見ると昭和史十五卷」という歴史に残る全集を編纂しました。

その頃、東京出版販売会社の杉浦社長が、幕臣杉浦梅潭の四十年にわたる貴重な日記を東大図書館に寄付しました。

君がその整理分析という大役を引き受け、まず現代文に翻訳した後、新潮社から「最後の函館奉行の日記」という名著を出版し、幕末史における新事実をいくつつか発見し、歴史家として高い評価を得ました。

君は「梅蔭寺・清水次郎長伝」「次郎長と明治維新」「郷司浩平小伝」「七代目鈴木与平伝」「播磨屋物語」等の作品を完成し、また清水開港百年史を編纂しました。

私とは念願の共著「清水次郎長の経済学」を東洋経済から出版しました。また、君は頻りに静岡新聞の文芸欄に書き、また郷土史の新しい事実を次々に発表しました。

君の活躍は文筆だけではありません。二十年前に「次郎長翁を知る会」を発足させ、市当局と協力して命日には記念行事を行ない、毎年次郎長史跡巡りをしています。

また、次郎長船宿を現物と同じ素材で復元し、そこで君はしばしば連続講演をしました。また、君は清水の都市間交流の先頭になつた。

まず、次郎長を沿岸警護人に抜擢した浜松藩士・伏谷如水の最終赴任地の市原市と、次いで「清水次郎長遊俠伝」を書いて次郎長を全国で有名にした明治の歌人天田五郎の故郷・いわき市との交流を深めました。

三月の終わりにお見舞いに行つた時、君は私だと判り、長く手を握り仕事をやり残した無念さを語っているようでした。それは、清水の廻船問屋の戦国時代からの歴史です。

私は君とは、両親よりも家内よりも遙かに長く親しく付き合ってきました。小学校、中学校のときは毎日のように遊び、君が東京から戻り清水で生活するようになってから、私も静岡に職を見つけて、毎週のように飽きもせず食事をともにし、また中国やロシアにも旅行しました。君がいなくなり、私の人生の大半が消え、これから先どう生きようかと困り果てています。

お互い必ず弔辞を読むと約束しました。不幸にも私が読むことになりましたが、間もなくそちらに参ります。黄泉の国はいくらか寒いかもしれませんが、少しの間です。待つていて下さい。その間、この世では、君は私の心の中でずっと生きています。

# 郷土清水をこよなく愛した人

清水郷土史研究会会長 山田 健司

田口英爾さん。

次郎長翁を知る会の運営委員会が開かれた二月二十日、あなたが入院されたと聞いて、みんな心配しておりました。

最初にお見舞いに伺ったとき、点滴注射をして酸素マスクもしており、会話をすることができませんでした。私に気づき、私たちはしばらくの間、黙ってじっと手を握り合っていました。あなたの手はとて柔らかく温かです。手のひらからは何か熱いメッセージが伝わってきて、その感触はいまでも忘れません。あれから、わずか二十日も過ぎているのに信じられない気持ちで一杯です。

思えば、あなたと出会ったのは、あなたが「清水港開港百年史」を執筆している最中でした。今から十五年以上も前でした。

あなたが最初に始めた郷土史発掘は正岡子規でした。子規は病氣療養を兼ねて、興津移住を決定していましたが、周囲の反対で断念せざるを得なく、その子規の思いを果たそうと没後百年を記念して、正岡子規をしのぶ会を設立し興津清見寺前の清見潟公園内に子規が興津を詠んだ歌、「月の秋 興津の借家 たずねけり」の句碑を建立したことでした。そして、子規の好きだった野菊を、

あなたは四国の松山まで行って持ち帰り、句碑の傍らに植えました。あなたの人間的な優しさがにじみ出ていました。

山岡鉄舟の世話で次郎長の養子となり「東海遊俠伝」を世に出した天田愚庵と子規との交流を語り継いでいこうと「愚庵と子規を語り継ぐ会」を設立し、有度山東麓の「駿富日本平の里」に京都産寧坂の愚庵の庵にあった柿の木の実生を育てていた福島県いわき市在中の愚庵研究家柳内守一氏の好意で一本譲り受け、いわき市から運んで移植し、そこに子規が詠んだ愚庵の柿の歌の句碑も建立しました。

「御仏に供へあまりの柿十五

柿熟す愚庵に猿も弟子もなし

釣鐘という柿の名もをかしく聞き捨てかたくて  
つりがねの柿のところが溢かりき」

愚庵の柿と子規の歌碑が観光の一助になればと  
考えました。

また、作家山本一力氏の「背負い富士」がNHK連続ドラマで全国放映されることになった時、これをチャンスと「次郎長で行かざあかの会」を設立し、次郎長マップの作成や次郎長映画の特別上映や史跡ウォーキングなどの事業を展開し、次郎

長フォーラムを大成功させました。

市民ぐるみの運動は、清水の町おこしに少なからず寄与することができました。これらはあなたが発案企画していつもその先頭に立って活動されていた。

清水の歴史を語るには清水湊の歴史、特に江戸時代の廻船問屋の研究が不可欠だと、清水郷土史研究会のなかに廻船問屋研究部会を設立して積極的に活動されていきました。

これら、あなたが郷土史発掘に果たされた功績は大きく、なによりもあなたが私たちの心に植え付けてくれたものは、さらに大きいものがあります。あなたが残された大いなる遺産と切り開いた道を、私たちはこれからもしっかりと、守り育てて美しい住みやすい郷土を作っていくかなければならないと思っています。

郷土清水をこよなく愛した田口英爾さん。なぜ、こんなにも早くはかなくあの世に逝ってしまうのですか。悲しくて寂しくて言葉もありません。

あなたの突然の逝去によって受けた、研究面の損失と精神的な打撃は大きく計り知れません。これからも、もつともつと教えていただきたいことが一杯あったのに残念でなりません。

田口英爾さん。あなたには清水郷土史研究会、次郎長翁を知る会、明治維新史談会、童謡・唱歌を歌う「せいくらべの会」と、多方面にわたってお世話になりました。ありがとうございました。どうか安らかに眠り下さい。心よりご冥福をお祈りしています。さようなら。

# 田口さんから託された

## 思いを込めて

作家 諸田玲子

田口さん、あまりに突然の訃報に、私は今、言葉を失っております。

田口さんと私は本当に不思議なご縁でした。十五年以上前になりますが、まだ作家になって間もなかった私が清水次郎長の小説を書いたとき、田口さんから厳しく叱責されました。大胆な発想こそ小説の醍醐味、あまりに人口に膾炙されすぎている人物なのであって既成概念に縛られず……と、次郎長の血縁でもあるため、好き勝手に書いた私は、まさに生涯を賭けて研究しておられる郷土史家の皆さまのご苦勞を思いやるゆとりがありませんでした。

その後はわだかまりも解けて親しくおつき合いをさせていただいておりましたが、正直なところ少々敬遠する気持ちもあり、二度と清水の小説は書きたいと思っていました。

日経新聞社で朝刊の連載小説を書かせていただくことと決まったときも、もちろん清水ではなく江戸の時代物を書く予定でした。ところが二転三転、明治を書くことに……。そのとき、なぜか「清水を書かなければ」という声が聞えたのです。そして真っ先に、自分でも不思議なのですが、田口さん

にお電話をしていました。

田口さんはとても喜んで下さいました。私も、今回は田口さんのご指導のもとに、誠心誠意取り組もうとはりきっております。何度か取材にもおつき合いたいただき、山のような資料もいただきました。わからないことがあつてお電話するたびに、すぐ調べてメール便でまた資料を送って下さいました。

入院される当日の元気なお声で「ケイタイを持ってゆくから何でも遠慮なく訊いて下さい」とおっしゃっておられました。まさか、それほど重病とは思いません、ご退院をお待ちしていたのです。

当初三月にスタートの予定だった掲載が、四月半ばに延びてしまい、それでもあともう少しで連載開始。そんな間際の訃報とは、これほど悔しいことはありません。一回でもよいから読んでいただきたかった……。それだけが心残りです。

でも、今思えば、田口さんにはなにか予感がありましたのでしようか。何度も私に「これが最後の仕事」「こんなに嬉しいことはない」とおっしゃって下さいましたね。長年のご研究の結晶

である貴重な資料を、借しげもなくお送り下さいましたね。

田口さんがいらつしやらなければ、最初の一行さえ書けなかったでしょう。

私にできることは、田口さんから託された思いを無にしないよう、最後の一行まで、心をこめて小説を書きつづけることだけです。連載を終えて単行本になりましたら、田口さんの思いを書き添え、広く読者の皆さまに伝えたいと思っております。

どうか、ご安心下さい。そしてどうか、田口さんの大好きな清水を舞台にした小説に、最後まで彼岸からお力を貸して下さい。本当に、本当に、ありがとうございます。

### 編集室から

●平成四年の第一号から二十年間、田口さんが編集した会報を運営委員会が引き継いだ。空の上から笑い声が聞えてきそうだが、やつこのことで発行できたというのが正直な気持ちだ。

●清水港船宿記念館「未廣」の「次郎長巷談」も運営委員会が引き継いだ。今年度の一回目は六月十二日の次郎長命日に未廣から梅蔭寺まで、百二十年前の道を通る「次郎長巷談」ガイドウォークを実施する。

●四月から日本経済新聞朝刊に「波止場浪漫」を連載中の諸田玲子氏の甲辞を掲載させて頂いた。誰よりも、田口さんが連載を心待ちにしていたと思う。空を仰ぐと「しっかりと読んで下さい」という声が聞えてくる。